

講義ノート

社会学研究法Ⅲ（ライティング）講義ノート

野 上 元

0. はじめに

この文章は、2013年度から開講されている「社会学研究法Ⅲ（ライティング）」の講義のうち、野上担当部分の講義ノートをもとにして作成されたものである。サバティカル（在外研修）で不在となった2015年度を除き、開講時より担当した科目であるが、科目の再編もあり、2018年度から担当を外れることになったので、学生・院生に共有できるように「講義ノート」のかたちで公表することにした。

なお、社会学研究法のうち、社会調査、つまりデータ集め方・分析の仕方については社会学研究法Ⅰ、文献収集のやり方や講読の仕方（問いがどう立てられているか）などについては社会学研究法Ⅱの講義に譲る。また、社会学研究法Ⅲについても、私の担当した部分は対象の定義・明確化や問いの立て方といった、論文作成の初期部分に係るものであり、具体的な論文構成法や執筆法については、研究法Ⅲの別の担当者が担当している。

1. 卒業論文はなぜ書かれなければならないのか？

論文とは文字通り、学術的スタイルによって何かを論じた文章のことである。ではなぜ論文が書かれるのかというと、「知的生産」を行うためである。卒業論文では、学生各自にそれを自ら実践してもらい、大学の学修の総仕上げをしてもらう。

とはいえ、別に構えなくてもいい。人間の能力は限られているので、もちろん、一本の論文による貢献もたかがしれている。別に卒論に大きな期待もされていない。けれどもそれが積み重なっていけば、それは社会や人類にとっての巨大な財産になる（はずである）。

私たちは、ニュートンほど賢くなくても、彼が発見した法則をあたりまえのように知っている。少し勉強すれば、それを踏まえてなされた別の人による次の発見、その次の発見…、というニュートンの「続き」が見えてくるはずだ。別の言葉でいえば、「知」とは、時間を越えた共有や分業によって成り立っているということである。知的生産物としての論文はその基本単位であり、手段だということ

とになる。

ただ皆さんは、別に知的生産のプロ、科学者・研究者になるわけではない。今回の卒業論文で、「論文」を書くのが最初にして最後だという可能性もある。一介のサラリーマンや公務員になる人がなぜ論文を書かなければならないのか、疑問に思う人も多いのではないか。

少し、高校時代の部活を思い出してみよう。野球、サッカー、吹奏楽などといった部活動もまた、全てプロになることを目指しているわけではない。ではそれらはただの趣味、時間つぶしなのか？ なぜ高校時代に部活動をするのが勧められたのだろうか。

それは、それが何らかの「成長」を促すからである。部活では、大会・コンクールを目指して厳しい練習が行われるというだけでなく、チームワークを学び、練習方法の改善を話し合うなど、各自の自主性に基づいた「成長」が促される。体力・技能を付けるだけなら、一人でトレーニングをしていればいい。その活動は、様々な面から学生に成長を促す総合的なパッケージになっている。

大学の学修の最後に配置されている卒業論文は、部活動の最終学年の大会・コンクールのように、その総決算となる。部活での大会が、いつもと違った雰囲気・格式・場所で行われるのと同じように、卒業論文も単なる作文ではなく、科学的論文としての形式に則っている必要がある。

その総合性についてより具体的にいえば、論文とは、主に「問い」と「答え」、それに至る「プロセス」によって構成される文章である。もちろん全て大事だが、「答え」は書き始める前に考えてもしょうがない一方、「問いを立てること」は、「課題を設定すること」であり、非常に汎用性の高い知的訓練だといえる。社会に出てからも、「問題を解くこと」はもちろん大事だが、さらに求められているのは「問題を発見すること」、「問題意識を経て具体的な課題を設定すること」のほうだ。つまり、問い（問題）がテストにおいて先生から「与えられるもの」であった高校生までの勉強と違い、それを自ら「作る」ことが、「大学を出た」ということになる。

この問いをうまく作れるかが、論文の出来にかなり関わってくる。

卒業論文とは、知的生産の実践を通じた大学時代の学修の総仕上げである。

2. 論文とは何か？——自ら「問い」を建てること

繰り返すように、論文は「問い」を中心に構成される知的生産物である。先生に問題が与えられるわけではない卒業論文では、自分が解こうとしている問題が、そもそも問うに値するものであるかどうか、それすら自分で説明しなければならない。

端的に言えば、「問い」とは、その論文が書かれる理由である。論文の冒頭部である「はじめに」や序章でそれが宣言される。そして「おわりに」や終章でも、

それにもう一度自ら立てた「問い」に立ち戻り、書き進めてきた分析のプロセスが、立てた問いに合致していたか、答えるものであったかを確認する必要がある。つまり「問い」は、論文を準備している段階から執筆が完了するまで、論文の作成や論文の記述を支える柱なのである。

では、問いはどう作ればよいか。解ければ良いのか？

極端だが、例えば「1たす1は？」という問い（問題）。これも問いではあるが、答えは「2」で、当然これは簡単すぎる。というか、そこに謎はなく、解いても意味が無い（解いても価値がない）問いである。逆に、「宇宙はなにゆえ存在するのか？」というのは、考えてみる価値がありそうな興味深い問いであり、解けたら人が皆びっくりするような問いではあるが、ちょっと簡単に解ける問いではないし、論理的に・合理的に解けそうにない。

つまり、卒業論文に求められるのは、①解く価値のある問いで、かつ②論理的・合理的に解答可能な問い、ということになる。問いとしての価値は重要だが、それゆえ難しくなりすぎてもいけないし、簡単すぎても価値がない。そのバランス感覚が求められている。

そして論文を書いていると、いったい自分は何を書いているのだろうかと考えてしまう、あるいはともすると、そもそも何をしているのか分からなくなってしまふことがよくある。疲れた頭でパソコンの画面から視線を外してふと周りを見回すと、世界のすべてのものが「意味を失っている」という危険な状態…。そうしたときに立ち戻る場所が、「問い」なのである。

論文とは何よりもまず、「問いを立てること」である。

3. 定義の重要性——研究対象のカテゴリ／対比・類比を考える

では具体的に問いをどう立てるか。だがちょっとその前に、しておいて欲しいことがある。対象の「定義」をすることである。というのも、論文が何かを論じるもの、つまり誰かに対して宛てたものである以上、定義によって研究対象を明確化しておかなければ前提が共有できず、そもそも科学的な議論が成り立たない。定義をしないで（あるいは明示しないで）始められた論争は、結局不毛なものである。論争が起こり、激しい応酬のあげく、結局問題は定義をどうするかによるものだったということもよくある光景だが、時間の無駄もいいところだ¹。定義は明確な議論を始めるために必要な前提である。

だが実はそれだけではない。「対象を定義すること」は、それによって自分が一体どのような題材に取り組もうとしているかについての理解を自ら深める機会にもなる。

試みに定義のやり方を具体的に一つふたつ、示してみよう。例えば「鉛筆」とはどう定義できるか？あるいは「パーソナル・コンピュータ」はどう定義できるだろうか？

じつはその名前に全て書いてある。鉛筆とは「鉛（黒鉛）の芯を持った筆（筆記用具）」のことである。そしてパーソナル・コンピュータとは「個人向け用途の（personal）コンピュータ」である。

ほかそれぞれでいくつか試してみたいが、定義の仕方には、共通するパターンをみることができる。つまり①それが所属する「類」を挙げ、②その中で他と決定的に区別される特徴をひとつ挙げる、こと、である。

定義は一般に、「所属カテゴリ」+「所属カテゴリの中での特徴」という形式を持つ。鉛筆は筆記用具の一種で、パソコンはコンピュータの一種である。かつそして、単なる筆記用具から鉛筆を区別しているのは「黒鉛の芯」であり、パソコンはコンピュータ一般から「個人向け用途（パーソナル）」というところで区別されている。つまり、普通「筆」は黒鉛の芯を持たないし、パソコン誕生時点でコンピュータは個人向けでなかったということなのだ。

定義することによって分類上の位置づけが明確になったとき、「鉛筆」という研究対象は（もしやるとすれば）「筆記用具研究」のなかに位置づけられるし、そのうえで、「黒鉛の芯」を持ったことの革新性についての検討をそれに続けることができる。

もちろん鉛筆は社会学の研究対象にはならないだろう。だが「パーソナル・コンピュータ」という研究対象のほうは、文化社会的・メディア史的に考えてみても、むしろそのネーミングにその興味深さの鍵がある。それまで「コンピュータ」は軍や研究機関、企業で保有される、組織で運用されるものだったのだ。それが1970年代、家庭・個人で使われるものになった。その革新性は、1960/70年代の文化政治（社会運動・反戦運動）と関連がある。

以前、「ご当地アイドル」を卒論のテーマにした人がいた。地元のイベントで参与観察をし、その旗振り役となった商工会の方にインタビューを行った卒論である。けれども彼が卒論に取り組み始めたとき、CiNii（論文検索データベース）で「ご当地アイドル 社会学」と検索しても、先行研究が全く出てこなかった。どう研究していいか、見当がつかないくらいの状況になった。

それだけ彼が「新しい」現象を扱うテーマに取り組んだということなのだが、それだけにいっそう定義の問題を慎重に取り扱う必要がある対象だということだった。一方で「アイドル 社会学」での検索はそれなりに出てくるわけだから、「ご当地アイドル」をアイドルの一種であると考え（もちろんそうなのだが）、改めて「アイドル社会学」の先行研究の成果を参考にしながら、「ご当地」性の持つ意味を必死に考えることになったわけである。

カリスマ論やメディア・イベント論、ファン・カルチャー研究など、アイドル社会学が前提にしていたものが、ご当地アイドル社会学では通用しない。だが、定義をよく考えることで、カテゴリの構造をよく知り、アイドルの一種としての「ご当地アイドル」の本質を考えることの足がかりをえるわけである。アイドルの一種だけと通常のそれと違う、という類縁性についての理解は、定義を自分で

試み、カテゴリの構造を考える経験からつかみ取ったものである。

このように、定義を考えることは対象の本質（似ていることと違うこと）を考えることに繋がり、理解が深まるのと同時に、参考となる研究領域も見えてくるようになる。類縁関係と相違を吟味しながら、関連する先行研究における「問い」の立て方を応用することができる。

自分の研究対象の定義をしてみたというあたりで、一度 Wikipedia や百科事典でそれを調べてみるとよい。もちろん見事な「正解」が書いてあると思う。意外と概要がつかみにくい Wikipedia はそっと閉じるとして、おすすめは『世界大百科事典』（平凡社、2007年、全34巻）である。各領域の専門家が一般の人を対象に、しかも研究状況の動向まで示してくれる。基本書・参考文献も含めて、とりあえずの地図としては申し分ない。新しく載っていないような対象は、毎年刊行される『現代用語の基礎知識』（自由国民社）を見るしかないだろうか。

また、社会学的な概念や方法に関しては、各種『社会学事典』も必ずチェックする（複数）とよい。弘文堂の『現代社会学事典』（2012年）には、社会学的な概念だけでなく現代的な現象も数多く項目化されている。これだけでかなり先行研究の「地図」を得ることができるはずだ。それらの英訳もチェックしておきたい。

じつはそこに注力する論文、つまり定義をめぐる揺れや難しさじたいを論文のテーマとするような場合すらある²。「○○とは何か」というタイプの論文がそう。そこでは、対象の定義のしにくさじたいが考察されるべきものとなる。例えば「インターネットラジオ」を考察の対象とするとき、その探究は、もはやそれは「ラジオ」（そもそもは無線電波 radio wave による音声放送）といえるのかどうかという問題を考えることから始まる³。

対象の定義を通じて、研究対象の本質や類縁関係、先行研究の地図を得ることができる。

4. 「問い」をどう立てるか？

これを補助線に、「問いの立て方」に戻る。問いをどうつくるか？ いきなりは難しいので、例としてやり方をいくつか挙げてみよう。

一番社会学らしい問いの立て方を挙げるとすれば、それは「常識を疑う」というものだろうか。「普通に考えれば○○なのに、何故そうではなく、○○なのか？」という問いの立て方である。この「普通に考えれば○○」という部分が「常識」である。これをひっくりかえし、そうでない論理的・合理的な理由を考えることを目指す。

常識をひっくり返すことには誰もびっくりしてくれるので、問いの価値を確保しやすい⁴。社会学がそれに向かいがちなのは、日常にふと目をやり、そのなかにあえて異和を探そうとする、という参与観察者・内部観察者の態度からくるの

もある。自明であることを改めて説明しなおしても意味がないから、自明に見えて、よく考えてみれば実はそうでないことのほうを探すというわけだ³。

ただ、常識をひっくり返すことはそう簡単ではない。常識にはやはりそれなりに強力な根拠がある。成功すれば鮮やかなイメージを残す発見になるが、そう簡単なことではない。もっと取りかかりやすい方法はないだろうか。

では、社会学の方法である「比較」（比較社会学）や「過去や変化の説明」（歴史社会学）はどうだろうか。それらは「問い」をたくさん用意してくれる。

「比較」には、「似ているのに違うもの」を選んで行く。共通点が多いAとBでありながら、片方がAであるのに、もう片方がBであるのはなぜか、という問いを立てる。全く違ったものを比較しても違うのはあたりまえだから、似ているものを比較しなければ意味がない。つまり、違いを生み出す要因を探すのである。前節で試みたように、定義を通じて考えたジャンルやカテゴリの構造への理解が、これを助けるはずだ。

また「変化」は、変わったことの説明（歴史社会学）だから、「なぜ」を立てやすい。なぜその変化は起こったか、ということだ。変化というのは見た目が明らかなので現象の特定がしやすい。比較と変化を組み合わせてもよいだろう（比較歴史社会学）。

さて、一旦立てた「問い」も実は、論文執筆作業のなかで不変のものではない。調べたり書いたりしているうちに、自分の考えたいことが明確になり、「問い」がより確実に絞れてくることや、あるいはややポイントを外したものであることが判明することがある。じっさいにデータを集め、おぼろげながら見えてきた「答え」とのあいだで、「問い」を微修正する必要がある場合もある。

微修正であればよいが、再構築となると大変だ。けれども、再構築に近いあたりで問いを再考しなければならないこともある。データは既に集め始めてしまっている…。器材はすでに買ってきてしまったが、料理のメニューを変えなければならぬという状態である。

「問い」の再構築、しかも大工事ともなると、論文全体が崩壊してしまう。全てを投げ出し、テーマを変えてしまいたくもなる。だから問いは論文の執筆に入るまえによくよく考えておく必要があるものである。だが、途中で問いが多少変わりうることは、むしろ織り込み済みにしておくべきことなのだ。そのたびに立ち止まり、「自分は何を考えようとしているのだけ？」と考え直す。暴れ馬、あるいはぬるぬると逃げるウナギのような「問い」をどう落ち着かせるか。

また、先にも書いたように、問いの価値（「なぜそれが問われなければならないか」）は重要だが、一方で、それが合理的に検討可能な問いになっているかも重要である。大きな問題に挑戦することは意味あることだろうが、執筆に使える時間・期間も限られている。先の言い方でいえば、検討する価値があり、かつ検討を合理的に進めることが可能な「バランスが良い問い」をどのように作るか。

もちろん、直接バランスのよい問いを作らなくても、価値ある「大きな問い」

を背景に、それを具体的に分析可能・検討可能な「具体的な問い」に変換・分解して、それを卒論の課題にすることができれば、それでいい。逆に言えば、「具体的な問い」は些末なものに見えるかもしれないが、価値ある「大きな問い」とリンクしていることを明示することで、「当面その問いを解くこと」の意義を確保できるわけだ。

例えば、「人はなぜ生きるのか」という問いは大きすぎて解くことは出来ないが、その問いを少し具体的にし、「人は何に生きがいを感じているのか」についての調査（アンケートやインタビュー）をすることはできる。

大きな問いを背景に、具体的な課題を設定してみよう。

だが、その二つはどう結びつくのか(その二つをどのように結びつけるのか)。そのあたりが難しさの核心である。自分の漠然とした問いを、どうやって具体的な問いに変換・接続すればいいのか。その際に役立つのが「先行研究」を参照することである。

具体的な課題まで完全に一致する先行研究は少ないかもしれない。が、「大きな問い」まで戻ってみれば、必ず何らかの問題意識を共有することのできる先行研究を見つけることができる。「定義」を通じて得られた対象の本質やカテゴリの構造への理解が、それを助けてくれるはずだ。そうすれば、対象の名前をいきなり論文データベースで検索にかけて「先生、見つかりません・・・」などという事態を避けることができる。

論文には、「先行研究の検討」というパートが必須である。これをどう書くか、あるいはそもそもなぜ書くのかについて考えてみよう。

大きな「問い」を背景にしつつ、より具体的に検証可能な「問い」を立てること。

5. 先行研究の検討の重要性

先行研究は、自分が考えようとしているものと同じ、あるいは似た問いを立て、一回は答えを出したものである。とすれば、参考にならないわけがない。というか、ゼロから問いを立てることなど、なかなかできるものではない以上、先行研究や社会学の他の成果から問いの立て方を学ばなければならない。

そして先に書いたとおり、知的生産が分業によるものである以上、論文執筆において先行研究を「検討」することは必須の条件である。全く新しい研究などあり得ない以上、何か先行する研究の存在に支えられるものになる。そのとき必須なのが、先行研究を「批判」することである⁶。

つまり先行研究の「検討」とは、先行研究に対する不満を述べることである。ここが足りない、ここがおかしい、などと難癖を付けることも、実は大事なことなのだ。そうしたことを通じて、自分の論文で何をするつもりなのかについて、見定めて行くことができるようになる。

もちろん批判というのは正当なものでなければならない。言葉を換えると、合理的なものでなければならない。とはいえ、いったんは完成したものである先行研究を批判するのももちろん簡単なことではない。ではどうすればいいのか。

それには、先行研究の「意義」も同時によく吟味しておくことだ。先行研究というのは、批判的に乗り越えて行くべきものであるけれども、一方で、自分が尊重すべき達成でもある。その意味をよく考えることである。「意義があるからこそ不満が生じ、批判したくなる」という文章を組み立てることができれば、それが「先行研究のレビュー」になる。以下のようなテンプレートになるだろう。

まず、①「○○[先行研究]は○○という問題を指摘し、○○という方法を用いて、これを明らかにしようとした。つまり・・・である。換言すれば、・・・を達成した。」と先行研究をまとめ、その意義を褒める。ここは素直に書けばいいだろう。

そして、達成した後には生まれる不備を挙げる、つまり達成しきれないでいることを書く。②「このように、○○は○○という方法を用いることで○○を明らかにしたが、そのことで同時に浮かび上がってきたのは、○○という問題であった。」(次のように、その理由も書いても良いかもしれない。②-1「○○という立脚点からスタートした○○は○○という理由でこうした問題に原理的に応えることができない」)

その問題をどうするか。すぐに自分の論文でやりたいこと、「問い」を書いてもいいが、他にも先行研究はあるはずだ。他の先行研究を参照する場合は、次のように繋げるとよいだろう。③「こうした問題に対し○○[別の先行研究]は、・・・することでこれを解決しようとしている。つまり…」(①に戻る)。

この①～③のループが、先行研究の検討(レビュー)というものである。それを通じて自分の研究の居場所が定まってくる。①でみたように、先行研究はまず褒めることが肝要である。自分にとってもその方が実は楽なのだ。大学院生の論文などで、この「褒める」部分をすっ飛ばして、先行研究を小気味よく批判してゆけどだけのレビューをみることがあるけれども、「ほうほう。で、おたくさんはそれらを一挙に解決できる完璧な論文を書くのね!」と、自分の首を絞めるだけである。

批判は、下手をするとブーメランのように戻ってきて自分に突き刺さる。それに気づかなければ、論文を書くことで世間に恥をさらしていることになる。だからこそ先行研究の誠実な検討は知的生産にとって重要な作業なのだ。

限定された研究状況や研究の条件のもとで、先行研究が何を選択し何を達成したのかを最大限尊重する。①～③を何度かループし、④「だからこそ今求められているのは、・・・を考えることである。[それが私の論文である]」。つまり、先行研究を尊重しつつ批判できれば、「その残された問題に取り組むこの論文は偉い」ということのできる。

逆に言えば、先行研究が完璧で全く不備がないというのであれば、そのテーマ・

対象で新たに論文が書かれる理由が存在しないと云うことである。

繰り返すが、先行研究の批判は簡単なことではない。この講義の担当ではないけれども、論文を読むときには頭の中でつねに批判しながら読むようにするという意識が必要かも知れない。

その意義を認めながら批判する、という場合には、先行研究の (A)「データの不足」(→なのでもう少し調べてみる。別の事例で検証してみる) や (B)「方法の不適切」(→なので別の方法で分析してみる), (C)「前提の置き換え」(→なのでよく考え直してみる) というあたりを考えてみるとよいだろう。

少し先に進んでしまった。先行研究の検討は、「問いの立て方」について参考にするだけでなく、前提の措き方、分析手法やデータの選択、論証の進め方などにおいても参考になる。先行研究が出している「結論」が実はそれほど重要に思えず、その問題設定の仕方や分析プロセスのほうに自分にとっての意義を感じるようになったなら、それが「先行研究を読めている」ということである。

その意義を確かめながら先行研究を批判することで、自分の「問い」を明確にすること。

6. よく構成されている論文を解剖してみる

以上を頭に入れて一本、論文を解剖してみよう。できればそれぞれで学術論文を用意して欲しいけれども、ここでは、日本社会学会が刊行している学術誌である『社会学評論』から論文を一本、採り上げることにしたい。『社会学評論』に採録された論文は、発表後数年の後、ウェブの総合学術電子ジャーナルサイト「J-STAGE」にてPDF形式で公開されることになっている⁷。

採り上げる論文は、安達智史氏による2010年の論文「ポスト多文化主義における社会統合について－戦後イギリスにおける政策の変遷との関わりのなかで」(『社会学評論』60巻3号, pp. 433-448) である⁸。その年の優秀論文として、同学会から優秀論文賞をもらった論文だ。以下は、これを手元で参照しながら読んで欲しい。

とくに「1 背景と課題」(pp. 433-435) が、この講義ノートでも説明したかった部分に対応するので、特にこの部分に注目する。分量的にはわずか1頁半と言ったところだが、大きな問題意識と論文の目的を示し、そのために設定される具体的な課題と方法を示す、という部分である。みなさんの卒論であれば、「序章」や「はじめに」の部分である。

節のタイトルには副題がついている。自分の問題意識の勘所を一行 (もしくは半行) で述べる必要がある部分だ。「社会的結束と文化的多様性の両立」。これが、ここから始まる彼の論文の中心的なテーマである。

この二つがなかなか「両立」できないからこそ「問い」になるのであり、逆に、たんに「両立は難しい…」で終わるわけでもない。それがどのようなかたちで論

文において「問い」になるのかを、考えながら読んでみよう

論文の最初の段落の書き出し、「グローバル化にともなう移民や多様なエスニック・コミュニティの増大は、先進国社会に多大なインパクトを及ぼしている。」という部分 (p.433) では、まず研究の背景となる大状況が挙げられる。次の文からは、「それは、一方で、～(略)～。だが、他方で、～(略)」と、これを両面から捉える文章が続く。先進国の発展への重要な貢献と「不安の政治」の顕在化という両面性のことだ。

ここで早くも「(Goodhart 2006)」と、ジャーナリストによる(執筆当時における)ほぼ最新の報告が挙げられているのも著者の目配りをよく表している。論文の書き出しに「世間でよく言われていること」が書かれていると、読者が論文の世界に入りやすいものだが、具体的に文献を挙げ、これは著者個人の印象や意見ではないですよ、ということを示すことも重要なことだ。

次頁の最初の段落 (p.434) では、「ここで浮上している課題は、～」と、前の段落に見られる状況の本質を別の言葉で言い換えている。そして「それは、政治哲学の分野において多文化主義をめぐる議論のなかで、1990年代以降論じられている問題である。」というように、その課題が議論される研究史的文脈が語られる。論点の推移を追い、その帰着を「(Kymlicka 2002=2005)」に定めている。紙幅の都合もあり、詳しくは書けなかったようだが、ここがこの講義ノートで触れてきた「先行研究の検討」の部分にあたる。

同頁の二段落目は、さらにその問題設定の本質を見定めようというものだ。結局それは、この節の副題に挙がっていた「社会的結束と文化的多様性の両立」なのだが、問題の輪郭を探りながら、問いは次のように設定される。「では、所属と安全/安心は、どのような形態で、そしてどのような政治的事由により両立するのだろうか。」と。

ここにも表れているように、社会学の論文では、ジレンマや矛盾、「理想通りにはなかなかうまくいかないこと」などが「問い」を生み出すことが多い。簡単な正解がないからこそ、あるいは、誰もが正解を知っていてもそううまくいかないからこそ、論文が書かれる意味があるのだ。

この段落の文章の運びは特によく読んで欲しい。前の段落で進めた研究史の整理による問題の現在(「文化的多様性をいかにして社会的結束へと収容させるかという問題」)が、Uberoi (2007) 論文への参照を経て、「所属と安全/安心」という問題へと変換されている。副題で挙げられ、前ページの書き出しから展開されてきた「社会的結束と文化的多様性の両立」が、「所属と安全/安心」という問題へと接続されているのだ。「所属と安全/安心」は、この論文のキーワードにもなっている。この段落がこの論文の問題意識のキモなのは明らかである。

つまり、冒頭からここまでの流れを振り返ってみれば、次のようになる。まず、①一般(ジャーナリズム)で語られている大問題・状況が示され、②先行研究の検討を経てその問題の「現在」へと繋げられる。さらに③それを言い換えるかた

ちで問題の「最前線」が示された、ということである。

けれども、この論文はその問題に直接（著者が）答えるものではない。論文著者の個人的な意見（価値観）が書かれているのではないのだ。以上のような「問い」の設定を経て、著者が選択した具体的な「課題」が同頁三段落目の冒頭で示されている。

「この間に1つの回答を与えるため、戦後イギリスの社会統合政策の変遷を考察する。」と。これこそが、本論文における「具体的に設定された課題」である。

つまり、絞り込んだ「問い」に対し、イギリスの社会政策の変遷を資料（データ）とする論文を書く、という課題が示されているわけだ。そしてここにも先行研究がある。Kymlicka や Uberoi といった先行研究は「問い」をめぐる先行研究だったが、この段落で挙げられているのは、同じ「対象」を使った先行研究である。イギリスの社会統合政策研究がいくつか挙げられ、その紹介が簡単になされている。もしこれが卒論であれば、もう少し紙幅があるはずなので、この講義ノートでも書いてきたように、それぞれの研究の意義や達成も確認しておきたいところだ。

ただ、佐久間（1998, 2007）は「包括的な研究」であり、Freeman（1979）と Bleich（2003）は「成立過程を詳細に描いた」というように、それらの概要を簡単に示すことは必須だ。それにより、「それに対し、本稿では、～」と、この論文の設定する「視点」を強調することができる。これは、「問い」に答えるために採られる「視点」、つまり政策の変遷の解説という課題における「分析の方針」である。

つまり、この段落の最後にかけて、イギリスの社会統合政策をどのように捉え、とくにどこに注目し、どう論じるかが示されている。そして「とりわけ、～」から始まるこの節最後の一文では、この論文が強く主張したいオリジナリティの強調になっている。つまり、「新労働党」の政策に着目することによって新しいデータにまで目配りをきかせ、「ポスト多文化主義における政治哲学の可能性を照射する」（p. 448：傍点引用者）という、本論文で達成されるであろう論文の成果の意義が予告されているのである。

大状況から入り、先行研究を挙げながら「問い」に繋げ、論文の具体的な「課題」を示すこと。

7. まとめ

論文は「問い」を中心に構成される。その重要性は計り知れない。けれどもこれまた書いてきたように、「問い」が始めからきちんと定まっている場合も実はまれである。多くの場合、なんとなくテーマを選び、先生に勧められた資料（データ）に当たり始めるという感じだろうか。

だが、まず「手を動かすこと」が重要である。一度読み、「ふーん」というだ

けだった先行研究（らしきもの）も、自分で資料を集め始めたり調査を始めたりしてから改めて読むと、不思議と身に沁みるようになっている。入り口に立ったということだ。

スタート地点では、「問い」ははっきりしていない。自ら手（足？）を動かさなければ、それは曖昧なままだ。アンケート調査であれインタビュー調査であれ文献調査であれ、個別具体的なデータに触れることで、結局何にこだわりたいんだろう、という自分の問題意識が見え始める。始めから論文作成の効率を考えるべきではない。データのもたらす実感と、先行研究とを突き合わせてみる。あるいは、その時点で改めて定義の問題を考えてもいいかもしれない。

これら全て、順番が決まっているわけではない。あらかじめ決められた「作業マニュアル」はないのだ。だからこそ「成長」が促されるというわけである。

さて。ここまで書き終えてみて、この「ノート」が執筆において直ぐに役に立つかどうか、私自身分からなくなった。ただ、論文提出直後には、確実に身に沁みるので、その時期に読むといいかもしれない（手遅れだが）。2～3年次の学生でこの論文を今読んでいる学生に言っておきたいのは、4年次の卒論締め切り2ヶ月前にもう一度これを読んで欲しいということだ。そして大学院生であっても、修士一年の終わりの頃に読んで欲しいノートとしてこれを書いた。博士課程の院生であっても、博士論文構想・執筆も大変な作業だと思うが、基本ができていない人も少なくないので、このような当たり前すぎることを再確認することも実は大事なのではないかと思っている。

筑波大の社会学の特色は、教員の数を頼みに各専門科目を羅列するのではなく、調査法・研究法やリーディング／ライティングの授業を配置していることにある。それは、社会学を「教えられるもの」として考えるのではなく、「自ら進めるもの」として考えて欲しいということによる。卒業「論文」に取り組めることが、どれだけ知的な成長を可能にするか計り知れない。もちろんそれは、論文執筆者の取り組み方次第であるけれども。

注

¹ 逆にいえば、ディスカッションの場で、相手の定義の曖昧さを衝くというのは常套手段である。「あなたの定義を教えてください」と問いかけることで、自分は次の議論のための時間を稼ぐことが出来るし、相手自身にその立論の整合性のアラを探させることもできる。

² 例えば、山田昌弘「家族定義論の検討——家族分析のレベル設定」『ソシオロゴス』10号、1986年など。

³ ネットで有名になった「トゲハムシ」の話。トゲがある「ハムシ」の一種には、「トゲハムシ」の名が付けられていた。その種目の研究が進み、その生態などが明らかになっていったあと、確かにトゲハムシの一種ではあるが、トゲのな

イトゲハムシが見つかった。仕方がないので、それは「トゲナシトゲハムシ」と名付けられるようになった。さらにトゲナシトゲハムシの研究が進んだあと、やっぱりトゲのあるトゲナシトゲハムシの一種が見つかってしまった。仕方がないので、「トゲアリトゲナシトゲハムシ」と名付けるしかない……。 (種差性の本質は、トゲの有り無しではなかったのだ)

⁴ ランドル・コリンズ／井上俊・磯部卓三訳『脱常識の社会学－社会の読み方入門』（岩波書店、1992年。原著は1982年）、好井裕明『「あたりまえ」を疑う社会学－質的調査のセンス』（光文社新書、2006年）など。また社会学者の著作ではないが、山本七平『新装版 「常識」の研究』（文春文庫、2015年。初刊は1981年）。

⁵ 社会学が社会問題の学問であることと関わっている。脱常識や「あたりまえ」を疑うという態度は、この社会は変えようのないものだという認識を変え、社会をより良く変えてゆこうとする態度に繋がる。

⁶ 一般的に「批判」は、人間関係を壊したりするものと思われがちだけれども、研究の世界では全く違う。批判が正当なものであれば、むしろ喜ぶというのが研究者である。研究の世界で一番きついのは、自分の書いた論文が無視されることである。

⁷ 次の URL で見ることが出来る。<http://www.jstage.jst.go.jp/> （2017年10月31日閲覧）

⁸ https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsr/60/3/60_3_433/_article 参照（2017年10月31日閲覧）。論文掲載時に日本学術振興会の特別研究員であった氏は現在、近畿大学総合社会学部で専任講師を務めておられるようだ。<http://researchmap.jp/s-adachi/>（2017年10月31日閲覧）